



  
 刀筆青砥石文  
 五

^ 13  
 3036  
 5





門へ 13  
號 3036  
卷 5

刀筆青砥石文寫水箴語卷之五

江隱 曲亭主人筆削

洛客 櫟亭琴魚原稿

第九套 新墓の陥穽 糸芋の隻緊

再説熊野且藏あまがねのくまのいんさうの曩なごは劇齋げんさいが指揮しやうより紀きの藤白とうはく赴きつこの盛さか味あじの  
豊とよ凶ゆうと檢けんて収納しゆなつの多寡たがを定さだめん為なる彼地かぢは逗と苗なを程ほどは名草なぐさが親類あひな里  
人ひとの劇齋げんさいを憎にくむものも且藏いんさうが温順おんじゆんある去歲こぞの未進みじんの催促さいそくも只その  
道理道理を述諭のたまへ奇おかしく債せうるをせざれば債せうあるものへさう入食いじきこれと嘆なげ  
賞せうしくその款待くわんたい大おほくわむも然しかば是處こゝの月待つきまち彼處かゝの庚申かうしん守まもり必かな且藏いんさうを

布指



賓あきとごおのうの招まねざるものなかりけり。ああき初秋あきの比ひゆゆく時ときお早はやく今いま茲こゝ八月はつげつの某たがひ日ひに  
 且かつ藏ざうが二親ふたおやの年忌としごみは當あたりいいま今いまこの便べん宜ぎよりよりく舊里ふるさと熊野くまの立たちたり志こころ念ねん  
 野のへ赴まゐりまゐつつ亡な親おやと親おやかりかり一ひと舊里ふるさと人ひとを訪まね信まねれて云いふふと相あ譚だんゆゆ藤白ふぢしろででままる  
 疎畧そりやくよよせせららうう一ひと且藏かつざうがが猛まうは故郷ふるさとへ還かへりり一ひと食を憑たへたく慰なぐさめめ相あ資まかす  
 二親ふたおやの年忌としごみを吊たせせむむ一ひと是こゝ渠これが人ひととなりなりと愛あいままるるめめ少すくくくむむその薄うす  
 命いのちを憐あはれれむむ一ひと日ひと推留おしりゆうされれて八月はつげつととあありり送おくりり一ひと既すでにに九月くわがつも  
 十日じゅうにちあありりななりり一ひと且藏かつざうハ又また一ひと藤白ふぢしろへ趣まねくく一ひと里さとの戸と別わかれれ告つぐぐ  
 富とみの金かねと累かさね々々銭ぜにを贈たまりりて路費ろひと資まかすすためめ土産つちさんを贈たまりり或あるも

孟まうと勸すすめめ皆再會みなさいかいを契ちぎるるななん且藏かつざうハ恩義おんぎを感かんんて涙なみだを禁こむむ難がたああらら。  
 一ひととわわふふははああららざざれれ又藤白ふぢしろハ杖つゑををああてて彼かれれに到いたりり比ひ及およびび六川むつがわ稻いな六むつ納のれ  
 一ひと登のぼりり持もつつ一ひと劇齋げつさいが田園でんえんを預あづかりり及およびび家いえを借かりり一ひと去歳こぞの  
 未進みじんハ今いま茲こゝをを加かへへ毫こゝろも遺のこささずず一ひと速はやととあありり只ただその人ひとのの地ち也なりも都みやこ  
 一ひとかかりりの餞別せんべつももの多おほかりり一ひと且藏かつざうハ劇齋げつさいが宛あてに取とりり路費ろひと今いまハ用もち  
 一ひと往還おうわんハ囊中なうちゆう餘あまりりありり主ぬしの物ものと物ものといいふふ一ひと銭ぜにハ沙金さかを換かへへ一ひと大おほ約やく十五  
 六む両りやうありり廻まわりり一ひと懐なつかししく十月じゅうがつの初旬しつげんハ藤白ふぢしろを立たちたつつ又海船うみふねハ舟ふねと遅速ちそくを  
 風帆ふうはんハ任まかすす程ほどハこの目めも追風おひかぜなりなり一ひと日ひもああるる難波なみハ着つぬぬこの時とき日ひハ  
 一ひと高たかくく急いそぐぐ一ひと今宵こんや亥がいの時ときまでまで一ひと必かなずず入いるる一ひと肚裏はらハ尋思じんしと



その船の着くとおどろく。歩あり十餘里とせむとされ初冬の日影短く暮  
 果て夜の如二更後と覺ゆ。此は京まで尚三四里ありかと思せば途より一  
 打火店は曉きうりし物もろ身の夜をこめて獨り便な夜を悔しく  
 ぞと今さらよと己にあらざればの直走をちりまてやうをく京に入る  
 程十日をり此月の影三更を過り既にして章魚菜師六角通と後よ  
 り三條まで来よけは富巷路へ遠くは叫散りと心後を疲  
 れ。勞は堪むとされ市店の檐下は兩個の入立在り小夜深く何のありん  
 怪しぬ奴らとあひつれどもういぢりしと邁と終三及より忽地後夜  
 人ありて足音もせぬ走近り巨壁を撥て且藏と羽交締り抱縮りて挨拶

えんとしければあらはらんと身と潜く振釋んとし程又一個の癖者あり向  
 が走り来て且藏が背前を就鳥個を奪いと捉る巻進る懐の財布の切と  
 衿共侶は廻り引くと取せどと拂へども前後は争ひつと声とより五賊ありと  
 呼ぶ癖者小人の如しと怯むとあうと背より幾撞と踢れば後方を癖  
 者もあつて小翠丸を痛められえん苦と叫びて狙るもど釈ども放た前なる  
 癖者忽地切と引断る財布を奪りて逃走れは且藏へ吐嗟とより驚怒る声  
 ゆり絞りと再賊ありと頻人と呼立て一町あり追か程は途中の石小跌れ  
 両膝折てと轉輾ぶとの隙に金を奪ひ癖者へを逃失り且藏も怒りた  
 ぬ堪むと遠く身を起して更後方をえんれば踏られ奴も逃去るその往方を







知るよありぬ。小夜更されば起ぬ。援るものなればこそ。命運の縮る所欲の  
 つま見と後悔の宵月塞りて邁もゆる。且早く又替り申す。多財の夜ふと毫むるも  
 惜むる足らざる。師への性怪し人々今その財を盗れて明々地々告るともいふべし。  
 實事とせしむるを聴れどちりも。勸解かば恥の人の恥。且六月の比ありしと。  
 紀伊國へ遣はし。月日を過し路銭を費し還る主人は損ある許さずとも。  
 阿容くしと面を杖さく。やむんぬ物りあがる。虚こと夜を花くひり来む。この  
 尊子よわぬ。ぬれぬ盗られ財を贖ふ術へ。緯の趣写遺して身と投る。  
 むひまけ。家路中へ入るも入る直に三條の大橋の中央に赴き。傾く月より物  
 對し。墨斗の毫と投出。自殺のやと送書。橋の欄干に結び留め流る水よ

身と任しと跳入らんと。支度と多。又つりとあ。今。命を預けんと。財の  
 返らよわぬ。学問の為仕へる身と。隨は捨んよ。これ。恨を飾るは似り。且年来此  
 師恩か。宿志とも。遂むしと。溝壑は死見。これ。愚之。只白地よ。告て  
 死るとも。生るとも。主人の意は任せん。と。あ。く。深。これ。噫。あり。と。ひ。り。と。あ。り。今  
 欄干に。締る。送書と。ぬ。り。と。引。裂。採。之。河。に。投。捨。馳。と。踵。と。旋。く。富。巷。路。よ  
 か。る。物。々。有。繫。よ。羞。く。門。を。敲。く。と。坊。々。知。と。く。遍。波。の。度。り。つ。る。程。に。  
 曉。と。近。く。な。る。隨。は。皆。ひ。い。り。月。の。跡。の。星。の。光。と。も。仰。ぎ。只。顧。は。嗟。嘆。し。つ。言。と  
 正。路。は。れ。が。と。か。へ。ぬ。死。恨。を。自。許。せん。面。を。顧。み。京。極。三。條。の。蓮。華。院。の。方  
 丈。の。主人。と。師。壇。の。交。り。住。持。と。憑。を。り。く。る。恨。を。主人。に。勸。解。か。ば。吾。倚。か。つ。る



のせんより選○ちりりて便宜びんぎのふし。これより外ちはせん是あつと。と多ひどもちや頭びんと  
 病ましく蓮華院れんげいんは赴おもむく程ほどは東あづま僅ひんはあつたり寺てらの大門だいもんはあつ閑ひま然ぜんも只今人の出  
 ともあ右方みぎがたの角門かくもんの半開はんかいありはるがまあは進すすみ入いる食堂じきやうのこま赴おもむひ梵ぼんの  
 左ひだり邊へは立たる松樹しょうじゆ下したは物ものありと見みると光ひかりまはり何なにありと立たありと取とりあげ  
 へもバ小鏡こがたみとあへき物ものはあへればわもあつ詩うたは曉あけゆく方かたは推お向むく  
 久ひさしう熟視じやくしもバ鏡かたみの裏うらは形かたちありと水みづの字じと鑄いりありとあつ豫よて認しんりぬ主人しゆじんの  
 愛あい妾めかけ阿あ磔たてが以もつる鼻紙びし排はの裏うらは納のる懐中鏡くわいちゆうかたみは似にたりけり。わればこの夕ゆふ  
 くれはるは彼婦人かのふじんへ寺てらは詣より遺いり方かたはあつ秋あき相あひま似につるものわればあへば何なにと  
 定さだふるははるもあつあれば蘭若らんじやくの物ものはこれ方かたは進すすせり願ねがひのこつ死しは

甚お多ととあへば懐なつかし扱あり食堂じきやうの門かど傍かたは立たり内うちのあつと窺うかがふは炊人くわいじん小こを  
 起おこせりあつ打うちく柴しばの反へる音ねは當下たうげ且かつ藏くらひ密ひそかつ呼よび門かどあつ試しは戸かどを推おは  
 さあつとひ死しへて進すすみ入いる窓まどの下したは炊人くわいじんより對むかひ某たれへ當院たういんの檀越だんてつ某甲かたがひ  
 後のち僕わがへ竊ひそか願ねがひ死しりあつ未明みへいより事ことはあつ誰たれもこのつらまを緯いとは  
 あり始はる所ところ化達けだつはこのつらまを緯いとはと他ほかもあつとつらまを緯いとはとつらまを緯いとはとつらまを緯いとは  
 易やすにたつなまもこの曉あけより殊ことまは元もと紡紡るる事ことありとつらまを緯いとはとつらまを緯いとはとつらまを緯いとは  
 遣やらるるその餘あまの法師ほふしへ朝勤あさごんは皆みな本堂ほんだうは聚あり且かつつらまを緯いとはとつらまを緯いとはとつらまを緯いとは  
 らばつらまを緯いとはとつらまを緯いとはとつらまを緯いとはとつらまを緯いとはとつらまを緯いとはとつらまを緯いとは  
 霜しもを深ふかくは道の程ほどを寒さむくはる彼かの処ところの部屋へやは地ち炕かうあり足踏あしふみ伸のびて



ぬくまのあへいごとと致待りたる人の情は推辞なくしてあつて許しあひ神と  
 応ぐ草鞋の切解法炊人おが部屋を掃く地元の邊に赴けが森を  
 離る鳥の聲は窓の隙より天へ明り案下某生再説名草劇齋が富  
 巷路の宿所中この日旭の空比蓮華院より使僧来りけり劇齋  
 則對面しくその来意を尋むが使僧へ安否を問ふに尚青の頭を  
 拊心するにそのいへこのかた寺は莽らうし和君の愛妾何れ信女の柩を  
 獲たり盗見ありと真夜中のうらまへ毎曉は墓巡りも回向の役僧これと  
 えと云々と告しにうらまへも人もなき知りとて告すとて方丈の  
 ところへ法衣の切を結びあて忙しく来るやえとて形迹をえぬ

うと使せば劇齋はさうも驚かす甚だ珍敷之恨らくは賊を捕へ  
 むらりしそかへも巧むべき某追つたるべし貴僧はあまなりと  
 あれらの赴方丈へもうしめと回答し使僧は著りも減る腹を  
 抱へて勢が寺へ退りたる程は劇齋へ備入ホは苗守さうくは蜜八を  
 ゆる遠く蓮華院に赴たう云々と案内し一二の役僧共侶に墓  
 所のものも幾れなる阿磔が空をさし覗くもゆくも壞を掘起せし  
 柩破れて屍頭埋れ果ぬた人の雪肌泥ま塗れて尚消残る氷室  
 似たり只被柩は歛く埋り阿磔が衣裳調度おの物ひるもあつと  
 けり劇齋怒る眼を交しと法師們も對ひあは釋のものをぬる盗見



あつたはいつくして極は物ありとぞ知るべし。宿所へ今奴婢寡一今朝ぬく  
来つる蜜八の三只疑ひの寺内あり。竊はあふ昔もてよへ誘ふとちつれ拉く  
客壇へ退き死方丈の西のつら根のやとり遺る物あり劇齋目を  
指して密へく取つるはあか紛ふくもあぬ。その阿磔が極は納る渠が  
鼻紙挿るれば冷笑の法師をえり。この物あらは送るが疑ひ多く寺  
内あり懇も他を求めたといはれ寺僧ホ快くはと誣しとあつる皆黙然  
とて劇齋を客殿に伴ひのあてこれ被密談ひるまど中は老僧あり  
眉根をのせく沈吟し既は送せ紙挿あは劇齋老の左は右疑ひを  
理り且藥中を召りて昨夕さるものあり。渠は問ふといふ衆皆この

議は後守門なる半道人藥中を召りて縁類を招き近つて夜中を  
實問は藥中巻て昨夕さる人なり。入る人なり。劇齋をさすけく端  
近く進みあつらん。是非及び寺内の道俗漏れをなくこの丸を聚會  
嚴は糾問あへ或はその返答濁り顔色変るものあふ。穿鑿の術あり  
べ。とくといふ。これが役僧ホの今さる勢ひ已とぞゆき。遂は住持は  
あけく衆人を集る程は劇齋ハ先を逃去るものあらん。秋とて密八に  
あつるをゆきとてよく出口と守らせり。不題草樂偽二郎ハあつる九月十三日  
劇齋が都へれ信は驚忙と猛は阿磔に別れあり。筆執るまもてつ  
いつくといふ。密翰を遣るべし。あつるが心は繋ぬ舟の人にあ















答る折る。食堂の。騷く。罵る。声の。き。けれ。ば。衆。皆。再。驚。た。く。こ。も。何  
 ぞ。と。え。え。り。る。隔。亮。と。破。と。蹴。む。く。め。是。則。密。へ。且。藏。が。衿。上。へ。引  
 搦。米。の。席。上。に。破。と。推。ま。せ。く。劇。舟。の。對。ひ。某。の。仰。せ。る。お。み。く。外。に。立  
 或。内。に。入。り。四。下。に。眼。を。配。り。程。よ。こ。の。夏。紀。の。路。へ。遣。され。是。奴。の。の。程。中  
 還。り。て。こ。の。寺。に。食。堂。の。内。の。下。小。屋。に。隠。れ。て。り。そ。の。為。体。怪。し。けれ。ば。穿。鑿。せ。ば  
 と。走。蒐。く。矢。庭。に。捕。へ。ん。は。是。肉。せ。懷。あり。こ。の。小。鏡。を。落。し。り。是。奴。昨。夕  
 墓。と。發。起。り。耦。賊。ある。と。疑。ひ。や。と。の。め。且。藏。些。も。騷。く。と。師。君。上。に。在。り。  
 皇。天。頂。と。照。し。多。は。毫。ぶ。り。も。偽。ま。う。た。某。ハ。今。朝。未。明。に。當。院。に。推。參。り。て  
 こ。の。小。鏡。を。拾。ひ。た。豫。々。認。れる。物。は。似。た。が。方。丈。は。な。せ。き。ん。と。や。く。懷。め。り。と。

その故の箇様々と昨夕歸洛の途中の賊難告るを劇斎聴きく可く冷笑ひ  
 各各是奴を識めりや。弟子若黨と父の曩の故郷へ遣せし歸京を  
 隠れり。その不良も死の。況彼地あり持參の金と引剥し奪れり。とど  
 口々くもあらう。必賭突欲遊女の為は彼金を喪りて悪心ゆく増長し偽三郎  
 謀合して阿礫が墓と發起りんと。傳めり。敦圀に密へる。と立かき。と  
 且藏へ搔遣衝退禁ても留らざ。主命の虎の威を借る。狐索掠あり。と  
 高き傳めり。縁頼は牽き。劇舟左右とえり。一賊は片つけ  
 偽三郎何とせ。切中く走。倍と官府へ訴。お。え。ん。り。の。お。め。く  
 と。只。管。は。促。せ。役。僧。の。今。に。た。救。ん。た。子。救。め。り。く。匠。藥。中。渠。を。走。り。そ。





劇齋謀て  
宿  
怨を齎は

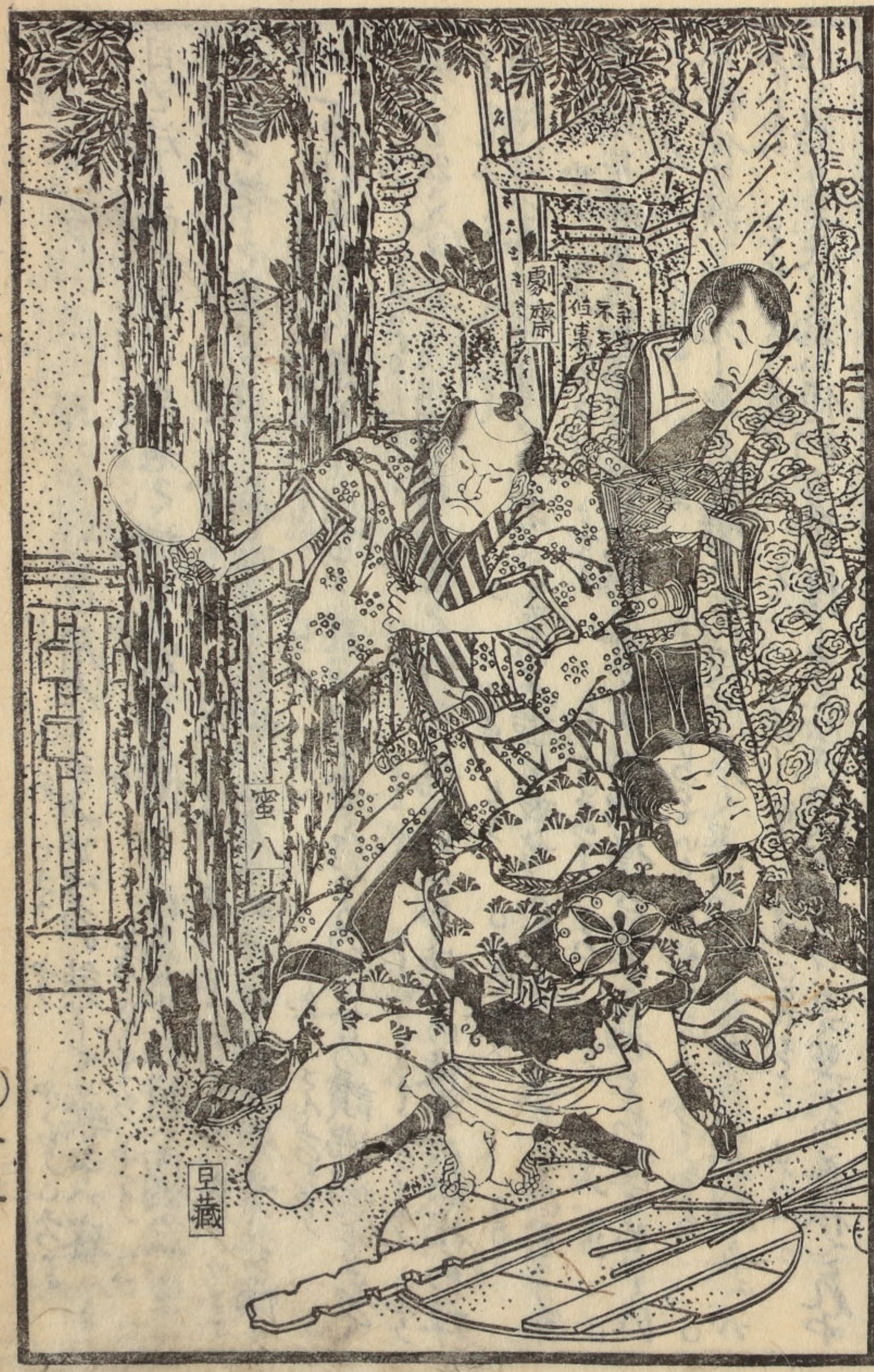
役僧

出  
返而信

寛元三甲辰年  
叢蘭秋風居士  
八月二十有二日

茶中

偽郎



巨藏



と声をかかれ偽二郎の偽解人と争ふと云ぬ然して薬中の蜜八は  
 目と注し兩人齊一立菓を押し索を懸けける當下住持の両個の行童を  
 前後に推して奥より劇齋より對ひ此度の珍更言語同断貴光の憤り  
 理を考れば出家の忍辱を鏡とし慈悲を舎するもの且その讚佛場ありて  
 罪人と思ふは是彼以佛意違ふ抑この偽二郎は法中の徒を破損の徑  
 卷繕写の為月来傭まめりてその暇を取せし今朝退き入りて悪事の  
 露頭是非及び在家僕且藏と云ん共侶拙僧が法衣の袖より掩をもち  
 只穩便の議を以克一更と勸解ふん役僧衆人異口同音に院主自親和解ふへ  
 枉て放り失ふ物掩門がより復しん必死の人を助くは是莫大の善根これゆ

あしる功德を皆人膝と抱え行くと叮嚀を賠話れども劇齋頭とうち掉く  
 否院主の辱く這奴が命を乞ふは諸道徳も亦等く法音を費するはこれども  
 これに尋常の賊あり滅済の新墓を護れ佛敵をば且佛教を五戒  
 わり祇律わり檀中の墓を護れ賊を免せといふ諸檀越悉改葬して他  
 宗とあらん弥勒の出世よあそむ世尊再来と和解さし這奴は決して免  
 かく六波羅殿へ訴もしく奴の錯と云ん勿論を席と拍て拒む打う六  
 波羅の功曹兩人浴中を巡行して非常と敬言人為よ歩卒五六人をねく京極の  
 邊と過る目くみは憇んとて蓮華院に進入り客壇の外より案内を請  
 せらば劇齋ハ誰あつんと障子の隙より透しをよらるる彼功曹ハ豫て



相識のめがれがあら竊は奪びてさう障子を推して役僧と共に迎入れて云と  
 告ぐ功曹さうち点頭さう偽二郎且藏六つを罪人かきさるわん殺さ  
 廳の仰さうけり俺們日毎巡行もれが見脱せ死めあわびば許さわら  
 劇齋老の役僧共侶同註所へ事しは二戒は俺們うけるべとの偽二郎且藏六  
 跪悲言て冤枉のさうとひげども既さる臍物り陳謝ハ絶くその詮のさ  
 あら廳さうせさ私を放さんとのわん叱懲くさ西人と牽立さう既官舟の沙  
 込とわん住持もれを救さすわん畏りさる役僧にあらさう七六波羅へ  
 とく遣さ劇齋も亦監へお功曹も後ひる意氣揚くと移りぬたさ  
 第九套の下 乱亭の隻隻緊

却説西功曹の偽二郎と且藏を牽せり前人名草劇齋及蓮華院の役  
 僧もお六波羅へかり事の趣とさあ打さう摠管北條長時  
 この日もさう廳さう浴中ある民の訃と判断の最中さる前案果て劇齋  
 小と悉坪の内へ召聚會さる所と聽さる劇齋と法師さ訂さう咄合されども  
 偽二郎と且藏が陳は趣さう偽二郎が行李の内より被衣裳掛竿  
 頭且藏が懐中より被小鏡さうとさ是彼との賊さる證扱既さ明へ但劇齋  
 その妾磔とさるがさ遺愛の物ありも可惜に衣裳調度と指さ斂さ埋め  
 一は国土の費さ文のさるの懲甚く学医をどいれる人かさ大似げ死所為と  
 しく叱懲されり畏りささ長時則功曹く偽二郎と且藏を緊しく



獄舎に繋し劇齋と蓮華院の法師が再び召せし居べしとてさうおに還  
 されたり。さてその次の日功曹よりけりて偽二郎且蔵の西罪人を獄舎より牽  
 出せし勘向大さうらふれども切なく偷し多かりしが偽二郎且蔵とてその夜の盗賊かんと  
 ぞ且蔵亦阿彌の墓を盗き一賊ハ偽二郎おんとて之を迷は相譲りて彼を  
 浪華へ起すのふし趣をもちてのそり奪り出せ衣裳粧具ハ之絶これと  
 知らぬそハ恨あるの濡衣と被せんと竊し納置とんと陳じ此ハ藤白あり婦  
 京の夜利剥し主の金を奪れ調達の柳あまに蓮華院の住持を憑りて勸解  
 せしとて偽二郎彼寺にぬれ朝寺内中へ小鏡の送らるるあり住持は進み見  
 ぬは懐きまざるの願くハ明夫人この件の冤屈を賢察し之と叫びて答の下に

平伏し二人齊一罪も服せぬ。日毎に答を重くして三四十日責る程は  
 是彼共背破れ氣絶せると屢おれ偽二郎苦痛は堪はれぬ腹裏にあり  
 彼小鏡の證據あれど夜の賊ハ且蔵おべしとせし渠ハ心もぞく呵責を忍び  
 首伏せしが渠あり前よりれを責殺さむぞわんざんとてかたて助りてハ  
 冤枉ありと罪も伏し一日の苦痛を免れとて死せんと覺期しつ跪せし  
 まるご命の惜れは一旦陳下ゆひが御勘向の苛なうり今ハ脱れ果さるは  
 實に劇齋が妾の棺も云云の物あり豫之相識且蔵が歸京のその日途中に  
 小人を告しにあり則渠と謀合しその夜件の墓を盗き衣裳調度を引出し  
 等しく分ちぬらう程まゝ鶏鳴曉を告し其塚を覆ふの暇もなし



露頭連ろたんづらはゆいと実まことに首くび伏ふせり功曹こうそうをえさればを偽いつはり二郎にらうが事ことの既すでにの  
如ごとくおん且藏やみくらうも脱だつる路みちをさく首くび伏ふせられあが苦痛くるしみわびりたけりやとせめて青あお問とへ  
ども且藏やみくらうのいひぞ肚裡はらみにあり路みちをさく不ふ覚しやうに夜よ行ゆくと主ぬしの金かねを奪うばれり且  
蓮華院れんげえんよりあがれ彼かれこ送こう小鏡こがたがねと怒いかの為ために拾ひろねる皆みなこれあはれ  
怒いか今いまよりあまこの外ほかよりい罪つみ被からん甘心かんじんに刑けい戮りやくに就つぶ死しのいつをいひ  
えもあはれ墓かぶをた盗と賊ぞくの濡衣ぬゐを被かれり汚かれる名なと送こうあらん也なり偽いつはり二郎にらうの  
れと相識あひしるあはれ絶たく恨うらみあはれい今いまよりいれと抱かき共とも侶りよに死しえり  
あは抑何おさへんのいらんぞいこれい杖つゑの下したに死しをいもいあらん彼かれこ抱かれり同類どうるいといあらん  
と頗おほく恨うらみりいくいく呵責かせきを忍しのびいん功曹こうそうの怒いかは撲殺ぶくつかい物ものなりと

あは且またく答こたを止とめてあは偽いつはり二郎にらうが首くび伏ふせを惣管そうくわんへいえいわいらんこれいより長時ちやうとき  
朝臣あそぢの劇げき齋さいと蓮華院れんげえんの役僧やくそうを問注所もんしゆじよへ召まよせく偽いつはり二郎にらうが首くび伏ふせの趣おもを説と  
示しをいん且藏やみくらうが兼せむ伏ふの後のち俱ともに刑けいせいべいと告つ提ていせいあらん劇げき齋さいこれと  
うけあらん笑わらむ向むかへ退ひきい廳へいの左ひだり右みぎに東西とうせいを贈たまりいくあらん偽いつはり二郎にらうを誅つゐしいらん  
且藏やみくらうの再また問とをいんいびいく実まことを吐つべい罪つみ藉せき決定けつていせいるいまいりい誅つゐれる婢妾ひやくせつ墓かぶを  
今いま埋うめいるいとぬいくい臭くさ骸がと犬鳥いぬとりの啄つむいらんといのいれい差さしいといあらん  
歎なげけい功曹こうそうも諾だくひいていれいないしに惣管そうくわんに刑けい戮りやくの議ぎを勸すすめいるいまいりい  
心こゝろにい長時ちやうときに劇げき齋さいが療治りやうぢよりい筑紫ちくしの探題たんぢ胤時いんときの大病だいびやう平へい愈いせいとい  
具負ぐいの夢ゆめひいらんあらんい且藏やみくらうが首くび伏ふせを誅つゐしいらん偽いつはり二郎にらうを誅つゐしいらん

昔はたかひに...

...



り。律よかひくあるに。もかひりく且藏と問究ゆも余どく偽二郎も  
 冬。又獄舎ゆを繋せむ時。建長七年乙卯の冬。今茲も既もそのあり。  
 十二月の下。辭青砥左衛門尉藤綱。鎌倉の執權時頼朝。臣の容意と稟。畿  
 内守護地頭の善悪。和心と勘察。一民の悲訴と披。人為る。秋の比。よりく。  
 摂河泉を巡察。一更。大和路を歴。都より。六波羅を訪問。一。摠管  
 長時。対面。一。相州。時頼の命を傳。へ。政吏の得失を訊。一。長時。謹。く  
 教令。と。け。あり。近。来。京。畿。無。為。不。く。竊。盜。奸。民。あり。と。稱。一。但。一。條。の。難  
 案。あり。長。時。不。敏。ゆ。り。の。愚。を。の。情。を。以。て。按。下。煩。ひ。り。け。打。を。く。ば。延  
 尉の上。浴。入。寔。は。公。私。の。幸。ひ。の。故。入。箇。様。と。名。草。劇。裔。が。許。の。より。の。趣

偽二郎が首伏且藏。が。り。一。五。十。と。説。と。一。遍。被。難。案。入。且。藏。の。と。渠。の。小  
 一。く。落。込。き。御。邊。の。意。見。を。あ。り。一。介。意。を。教。え。と。叮。嚀。を。向。れ。藤。綱  
 小頭を傾け。と。せ。り。藤。を。破。と。拍。噫。危。う。あ。く。九。これ。の。案。驗。入。當。り。似。く  
 恐。ろ。く。非。ゆ。ん。彼。劇。裔。と。ふ。醫。師。が。多。く。其。豫。て。の。名。を。穿。り。渠。入。紀。の。藤。貞  
 中。之。と。が。兄。ハ。鎌。倉。より。鳴。影。屋。湯。治。と。呼。れ。質。殖。の。の。ま。ひ。ひ。今。あり。七。年。前  
 云。云。の。許。あり。亦。後。劇。裔。が。状。と。も。粗。使。笑。り。一。入。と。り。鄙。吝。中。之。且。奸。智。あり  
 との兄湯治。と。和。れ。れ。を。の。死。を。穿。り。遠。く。鎌。倉。を。走。下。り。兄。の。遺。財。と。極  
 獲。め。逃。去。如。く。藤。白。へ。歸。去。り。と。入。み。か。り。と。そ。入。近。く。京。へ。ゆ。く。の。醫。術。の  
 仍。り。秋。兄。の。送。財。と。り。あ。べ。一。さ。房。各。畜。る。劇。裔。が。よ。り。愛。妾。を。れ。が。そ。衣。裳







ちの絶くありげに。かゝる程は藤綱へ遠慮の因に當りおけん有。一日  
 長時は其如く如此と告ぐ。長時感佩しく。飲びよの詰且功曹は云云と  
 下知あり。それより功曹は成項を使と走て醫師名草劇齋と蓮華院の役  
 僧と問注所を聚合ける。されば又劇齋は毎日足と企て偽二郎が誅せむと  
 けふ致翌致と跋程よこの且六波羅より火急の召状をぬりされば欣然と之  
 蜜八と招めしむ。と吾今朝もこれと召す。ハ彼両賊を誅せむを  
 ぬんての。この這奴ボゴ首を削りて。汝のめはく親より。と之が蜜八うち  
 笑ふ。快たすぬん誘ふと回答す。主従のしく文度して六波羅へ入りて  
 云云とす。えぬげく蜜八と。とる。門前は笛り措た劇齋ひり進入りて。

局の内よある程は蓮華院の法師も参りて。おれがほより聚會より當下  
 一個の侍者奥より。結と直下。後墳の訴人名草劇齋へ。されりや蓮華  
 院の役僧より。来れ。飲と高き。よぬれ。が西人齊一頓首と。見前よ。をの。見  
 前よ。をの。相共。心。侍者點頭て。劇齋。ふ。けぬ。れ。惣管。猛。風  
 邪よ。あり。く。聊。恙。と。り。も。た。も。れ。も。勘。察。使。青。砥。左。衛。門。尉。上。洛。と。馬。を  
 當所よ。を。せ。れ。り。よ。あ。く。惣。管。の。代。り。を。ぬ。り。今日。砥。公。裁。断。せ。る。あ。この。首。と  
 あり。ぬ。も。と。嚴。よ。告。示。し。て。と。あ。奥。よ。退。る。よ。ぬ。ん。劇。齋。案。よ。相。違。と。吐。裏。安。う。た。  
 ぬ。り。竊。よ。ぬ。ぬ。り。彼。青。砥。左。衛。門。尉。ハ。四。聰。八。察。の。せ。え。あり。明。暗。を。照。は。と。  
 恰。燈。燭。の。ごと。く。曲。直。と。正。ま。と。準。繩。よ。似。たり。を。と。世。の。人。を。と。く。り。と。れ。ど。あ。あ。た。も。







